

朗読詩

テーマ「花」

鈴蘭の花

村田辰夫

朝顔

加納由将

青蓮

上村多恵子

花の姉妹

すみくらまりこ

桃の日

北原千代

勿忘草の求道

浜田千秋

バラ園

下田喜久美

はなめぐるみち 秋月夕香

再び訪れて

和比古

花の殻

司 由衣

テーマ自由

少年兵デイク・ネビソン君へー「この道はいつか来た道」

村田辰夫

銀の川

北原千代

星の乙女

すみくらまりこ

夜店を歩く

加納由将

詩人の魂

上村多恵子

空華の庭

浜田千秋

星の砂

司 由衣

生命の脈音

長岡紀子

竹が鳴る時

下田喜久美

異星の花嫁

秋月夕香

動かず

和比古

鈴蘭の花

村田辰夫

ああ いま 君がいてくれさえしたら
今世紀の初めにパリで流行した「ジューペキュロット」スカートが
どんな形をしていたかを 教えてくれるだろうに
わたしの専門は人体の曲線を測定して
身体にぴったりの紙型を作り出す技術理論にあるのだ
などと 主張したりはしないで
邪魔くさかっても 写真などを探して
見せてくれただろうに
もし 君がいてくれさえしたら

ああ いま 君がいてくれたら
戦後 ギゆうギゆう詰めの電車のなかで
つり革にぶら下がっているぼくに 黙って
鈴蘭の花を手わたし
自分は先に降りて 窓からその花を受け取った
あの鈴蘭の花は
その後 どこに生けられ どうなったのか
尋ねることもできただろうに
そしたら 君は いつものように
眉をよせ 控えめに微笑みかけるだろうに
もし 君が いま いてくれたら
もし 君が いま いてくれたら

穂高の見える河童橋の清流や
松本城の小ぶりの城郭や
知恩院楼門の太い柱の蔭でのことや
湖北の里の祠のことや
銀のスプーンの動かし方や
聞きたいこと 言いたいことがあるものを
君が いま いてくれさえしたら

君が いま いてくれさえしたら
君が いま いてくれさえしたら
こんな詩を書かずにすんだだろうに
それ誰のこと なんのこと と
詮索されずにすんだだろうに
いま 君が いてくれさえしたら
スカートの形のことと悩むこともなかっただろうに
君が いま いてくれさえしたら

朝顔

加納由将

呼吸が荒くなり自分の居場所すら見えないで何日過ぎただろうか、遠い帰り道で見つけた小さな朝顔の蕾は地面に落ちて色さえ失い破れていた。記憶の片隅でいまだに咲いて花びらさえ破れているのだ。指でこすってみるとくるくるとまいてかすかに香りが薫った。雷が遠くでなった。

青蓮

上村多恵子

あなたの しらじらしさは
わたしの そらぞらしさに
似ている

もってまわった
うそうそしさに
さむざむしい
風が舞う

いととしげな わざとらしさは
なれなれしきの
空気を湿らす

もうすぐ
いまいましさが
にくにくしい
ダイナマイトを抱える

ふり返ると
青い蓮が咲いている

そのあおあおしさに
一陣の
すがすがしさを
覗いてみる

花の姉妹―エオスとセレナー―

すみくらまりこ

奔放な愛に生き

誰にも傳(か)しず) かない

赤いひまわりのような

妹だった

静かな愛に生き

誰にも思われる

白い月見草のような

姉だった

妹は男との恋に破れ

美しい男を求めていた

高価な車で連れ去り

自分のものとした

彼の不死を願った妹も

彼の不老を願わなかった

すっかり年老いてきた恋人

すると部屋へ閉じ込めた

躁言をつぶやくばかり

泣言を叫ぶばかり

懺悔を絞るばかり

するといつしか蟬となった

それが最初の男だった

夜明けになると

美しい男を誘いにいく妹

ばら色の爪は

いつも整えられていた

まるで暁の女神のように

サフラン色のガウンに

光と輝きをまとっていた

そして逞しい男をみつけた

狩りの得意な男だった

腕のなかで妹はうっとりとした

愛におごった彼は別の女に挑み

その女が放った蠍の毒で死んだ

それが二番目の男だった

情熱の衰えない妹は

新婚の床から男を奪い去る

彼は八年間離れていても

妻を慕い続ける男だった

これが三番目の男だった

静かな月見草の姉は
たったひとり美少年を愛した
その少年は愛に満たされて
毎日男らしくなっていく

姉の願いはただひとつ
このまま変わらぬにいてほしい
この美しさを この寝顔が
わたしのものである限り

不老不死の願いは
聞き届けられた

それは生を止めること
丘のうえで永眠させること

姉は月の女神のように
日が暮れて、朝が来るまで
ずっとその寝顔を見て
優しく額を撫でるのだった

それは最初で最後の男だった

赤いひまわりの妹
白い月見草の姉

ふたりの愛の激しさと優しさは
恋人たちを凌駕したのだった

桃の日

北原千代

河原町二条のくだもの屋のパラーでフルー
ツサンドウィッチを食べたとき わたしは桃
をもっていた

熟れたくだもの匂いが客の舌をしびれさせ
あおい花びらのような熱帯魚が群れむれて
棚に並んだ水槽から客をみおろす

フルーツサンドウィッチは 運河や農場や検
疫所のおいがし かすかなオーガニック化
粧水のおいがし 熱帯魚はわたしの舌のう
ごきを見ていた

生クリームを泡立てながら くだもの屋のお
くさんはほおえみを浮かべた (桃をもって
いるのね それはとても腐りやすいのよ

棚のうえのあやうい水槽から 青いひかりを
はらはらこぼして 熱帯魚は泳ぎつづける

ナイフで桃を削っては 柔らかそうなパンに
挟み おくさんはほおえみながら透きとおる
ように衰えていった

フルーツパーラー跡の 錆びた鉄骨のうえを
鳥がかすめ飛ぶ
水槽は空に砕けた（くだものは羽をもつてい
るのよ

いつまでですか わたしの桃 いちばんおい
しいところを なんでもないふうにさしだす
桃の日

勿忘草の求道ぶわんそうのきゅうどう

浜田千秋

鮮青せんせいに光る蠅の針は
鋭い忘却をもつて
魂の領域を守護する

無秩序な刺激のなか
五感を放棄し
不変の価値に取捨を託す

昇るため、生の
極めるため、知の
謳うため、美の

実在の欠片を
然るべき光や水のみを

行為の種に
成果の根に
個の成長に

注ぎ続ける
愛するための
聖なる毒をもつて

バラ園

下田喜久美

都会の空を忘れさせる
空中庭園さながらに きこえてくる
ここは一体 どこなの

バラの語らい
バラのささやき
バラのほほえみ
バラの重なるの
濃淡の花びらの ゆらぎ

バラのアーチの 門をくぐると
おもいおもいに 出むかえてくれる香りは
生まれる前の遠い日の姉妹のつどっていたやさしさ
おとぎの国へとつづいていそう
そして 何よりもベンチに腰かけ
バラ園の主になつて
永遠の住家のように 安らいで嬉しく
一面に立ちこめてくる バラの香気

それはまるで天の使いのように
傷ついた心を
いとも優しくつつんでしまう

すばらしい物語に耳かたむけるように
沢山のバラの生気に いきいきと蘇り
幾万の優しい味方をえたと思つて
花びらのひしめく園の深さにつつまれて
私は涙を流します
優しさと優しさの出会いのために

はなめぐるみち

秋月 夕香

景色が水彩画のよう

長く続く道

一面のみどり

もじずりの 小さな花

母と私が

果てしない道をあらく

母の肩には 重い荷

幼い私は 何もできない

さみしさの 遠い国が見えた日から

流れ雲にながされてきた

いつかお花でいっばいの道で

母にあいたい

再び訪れて

和比古

写真のように止まっている景色

雲だけが大きく動いている

再び朝が訪れる

ねずみ色のもやに

昨日までの記憶が浮ぶ

命の証をさがして

ひとり歩いている

蒼く塗られた橋

誰も渡っていない

感覚のないとき

単調な黒い屋根がつづく

張り巡らされた厚い壁に

言葉は伝わらない

孤独な石の道に

足音も響かない

通りの木は傾いている

植木鉢はただの箱

花が飾られる

香りに魅せられたのか

鳥が舞い降りる

陽が橙色に立ち上がり
街は花の色に変身する
涙した緑が背景になる
風が新たな思いをさそい
言葉のように伝わる

何事もなかったように
また街は動き始める
仲間たちの鼓動が感じられ
橋の方へ歩むことができる
水色の夢が支えている

花の殻

司 由衣

記憶のずっとむこう

私は少女だった

梅雨が降りしきり

出窓のアジサイが青にぬれていた

楕円形の大きなテーブルに

フルーツ・ケーキと紅茶が運ばれ

おかあさまは仮面をかぶり

おとうさまは沈黙をつづけた

どこへ葬られてしまったのか

夕餉 青にぬれたアジサイが一片

空席の背もたれにへばりついていて

おとなの世界のことは

少女の私にはわからない

クレヨンで悶々を青く塗りたくった

梅雨の切れ間

何ごともなかったように

おとなの女は席に戻っていた

フルーツ・パフェと紅茶が運ばれ

おとなの女は仮面をかぶり

おとなの男は沈黙をつづけた

記憶のずつとむこう

私はおとなの女になつていた

抽斗の奥から取り出した日記の

青い頁を捲ると

葬られたはずのアジサイが

忽然とみめかたちをあらわした

(夕餉 空席の女は梅雨に打たれ

花の雫を愛する男の肉の中に埋めたのだ)

——花の殻を生きるために

少年兵デイク・ネビソン君へ——「この道はいつか来た道」

村田辰夫

十七才の少年兵デイク・ネビソン君

聞こえるか 湾岸戦争の今

君の耳は灼熱の砂漠の砂嵐の音を聞いているのか

夜闇のなかの異様な静けさに響く兵たち鼾を聞いているのか

それとも 号令の向こうの金属音や自分の叫び声を聞いているのか

聞き給え デイク君 Can you hear me?

君は勇んで志願した

陸軍少年兵学校に入ったのは十六才とか

君の両親はどんな思いでそれを認められたか

今はただ ただ君の無事を願っておられる

君は何のためにそこにいるのか

君は今 隊列のなかにて

君の名前が呼ばれば 君は返事している

君は確かに 生きている

だが 君はデイクという名で

「生きている」と思っているであろうが

君が永遠に「生きた」と認められるのは

赤い丸い花輪などで飾られた石板の下だけ

それ以外 君は君として生きていやすい

敵の砲弾であれ ナパール弾であれ

君が相手とする君の敵は

君を君として撃ってくるのではない
ただ発射角度と弾道があるだけ

そこでは 君は君でない 生きて動く君でない
標的ですらない

もし君に向かつて撃ってくる君の敵の顔をみたら
恐らく君は何故ここで 戦争しているのか訝るだろう

なぜなら 君の敵というてゐるその者は
君の故郷 エセックスで君が出会う

あの誰 彼と同じように
頬や目尻に皺をよせて笑う人だと分るだろうから

手をとれば同じ体温の持ち主だと分るから

兵が兵として戦う戦争の時代はすんでいるのだ
名乗りをあげて戦う時代はすんだ

あのエセックスの古城を背景にした
騎士道の時代はすんだのだ

戦争するのは 国家だ 大統領だ 政治家だ
武器だけだ

彼らの硬骨な言葉に騙されてはならない

ダイブ君 君は一生名のなき人生を生きろ
生きて帰れ

君の故郷には美しい森がある
君の家が海岸に近いなら おいしい牡蠣も食べられる

そこで老いればよい
今度の砂漠の戦争に参加したことを
きつと悔いるときがくる

平和な死に方のほうが
どれだけ尊いかが分かるときが来るであろう

ダイブ君 聞こえるか

君が君の母者人の胎内から生まれ出たとき
君は戦場で死ぬことを考えていたはずはない
まして人を殺すことを考えていたはずはない

ダイブ君

君は死なず 殺さず 生きて帰れ
そして君が年をとったとき

そしてまた 戦争が起こったとき
(人間は愚かだから また そのうちに始めるだろう)

その時 君はどれほど今の自分の行動が
愚かであることが分かるだろう

砂漠の砂を噛んだような悔しさが分かるだろう
今 このことを君に言っているこの僕の

この唾の味が分かるだろう
かつて少年兵だったこの僕の

この言葉の響きが分かるだろう
国や政治家の煽てに乗ったことも

別のまた愚かな少年兵に

この僕の言葉を伝えよ
そのことのために ダイブ君
君は必ず生きて帰るれ

詩集『わたしは鶉です』より

銀の川 水の舟

北原千代

銀いろの川にそってゆくと 道はほそくなる

おおぜい連れ立って讚美していたのが 数えるほどに
ひっそりやさしく ひとりずつ夜に入ってゆく

葦がしげり 旋律の乱れのように風が吹く

浄めの月に照らされ

水は澄んできたようにおもわれる

これから生まれようとしている卵生の球体は
うすみどりの膜におおわれて 水面を漂っている

島のような森がゆらめく

どうぶつが葬られる森は みどりがゆきわたり

風のいろも濃い

しぜんにかたむいてひとりずつ柩のような小舟に招かれてよこ
たわり

どこへゆくのでしょうか

あしたへ

それともはるかとおくへ

(生まれたなら永遠に死ぬことはないとあなたはいわれた)
水の息が吹きかかる

太古からのたましいが めざめている
未生の卵をゆりうごかし 生者の舟をはこんでいる

水は律動をおび 流れはゆるい
舟のうえ

てのひらで水を掻き 月をとかず

ゆれながら 水の舟で

星の乙女——アストライア——

すみくらまりこ

神々が地上にあり
人々と交わった

黄金の時代

ひとりの女神が
正義を説いた
人々は耳を傾けた

時代が移り

人々が貪欲になった

銀の時代

神々は地上を去り
天に帰っていった
そのときも

女神は最後まで

地上に残り

人々に訴えた

時代がなおも移り
人々が残酷になった
青銅の時代
女神は絶望し

心ある人々を残して
天に帰っていった

星の乙女は
空から鉄の時代を
見下ろしている

正義の天秤は
二つの皿で
量るものなのに

「いったい
幾つの正義が
あればいいの

もう人々が
好きなように
解決すれば？」

星の乙女は
哀れみの眼差しで
見下ろしている

夜店を歩く

加納由将

静かな村が異様な喧騒を孕みバックする警告音と熱気を帯びた掛け声は子供の心に小さな悪魔を送り込みさつきさえ含んだまなざしは親の財布を緩ませている屋は的確に射抜いて食い扶持を確保する、会話が意味を失くす時交錯する人影に蜃気楼が流れ薄れていく、埋もれた際限ない欲望は日常を離れ、自分で操作不能になり、自分の腕を食いちぎろうとさえする、家を出るとすぐに異国に誘われて三日間の夢をむさぼり、一年間村のどこかに隠れていても三〇〇年ほどたっている。

詩人の魂

上村多恵子

今日も明日も
私は出かけるだろう
世界のどんなどころでも
詩人の魂に出会いに
その魂と
響合うために

言葉の違いを越えて
詩人の魂を
声で聞く
詩人のたたずまいを
目の前で見ると
詩人の人生の生き方を
その過ごした
その有りようを
生々しく
掴む

どうしても満たされな
満たされなかった
魂の叫びを
言葉で

詩で

埋めるしかなかった

同類の

不器用に

孤独をかかえ

歩んできた友に

会うために

多くを語らなくてもいい

お互い

うなずき合い

同じ空気を

分かち合い

今生の地球上で

出会えただけでも

良かったと

一緒に

肩を組もう

今日もそして明日も

私は出かけるだろう

詩人の魂の

還るところを

見つけるために

空華の庭

浜田千秋

薄っぺらの眼が咲き乱れる
空華の庭で

水平線に縛られた
無機質な優しさの羅列が
視界の体温を奪う

艶めく翼も
煌めく鱗も
砂紋に棄てた
泡沫の徒花たちは

清幽の泉が
深海か或いは天上に
在ることを知らず

安らぎを求め
転瞬を水面に捧ぐ
愚昧な調和が香る
空華の庭で

星の砂

司 由衣

宇宙の止まり木にとまり
グラス傾けすかしてみると
さらさら さらさら 星の砂
グラスの底に沈む影がある

影が しみじみ と話す

幼稚園の七夕祭りのとき

五色の短冊に「彦星になりたい」と書いた

あれから はや五十余年を経て

ほんとうに織姫星にあえるのかなあ と

天の川に来てみたら

地球から逃げてきたばかりの

ぼくと 出くわした

ぶつきらぼうの ぼくと

ぼくは 真のぼくと出会い 涙した

影を愛する そのことに

何のためらいがありません

ほんの一瞬 星の目を閉じてください

わたしは虹色の衣を脱ぎます

影が 狼狽えながら に告げる

おお 織姫星の舞い降りるとき

地上での苦悩とかなしみ は

神秘的な女体のブラックホールに消えた
愛しい女 地上の織姫星よ

ぼくの いのちにかえて

永遠に貴女を見守らねばならない

あなたの眼差し あなたの声

愛すべき 被造物のすべて が

この地上に何一つ残っていないなくても それが

何の妨げになりましょう

影をみつめ 影に寄り添い

宇宙の渚を歩く

さくさく さくさく 星の砂

素足は 砂のかなしみ に涙する

グラスの底に沈む影がある

生命の脈音

長岡紀子

遠くから見たら 緑がかつた乳白色の花盛り
わたしの背の高さで放物線状に広がり
天空に向けて一斉に咲き誇っている

近くに寄る

と それは新芽

樹の名は知らない

私は幹に触り 枝を握りしめる

樹の脈音と私の呼吸音が重なり

協和音を奏でる

それは大地の奥深く張り巡らし伸ばした

根の先の先まで

伝え届いていく

新芽たちは歌い 歌声は

どんよりした曇り空をも振り払って

天空に届き 陽の光を招く

こうして私が今 生きていることと

お前の生命が合わさって

これからも生きていける気がする

近くに宅地造成の看板

間もなくお前は

バツサリ刈り取られ どこかに捨てられるか

あつて 他所に移されるか
その宅地に庭樹として使われるか
それも知らず
霧雨の中 はしゃいで新芽を揺すり
歌っている

竹が鳴る時

下田喜久美

あめゆきとけて

竹が さわさわと 空に のびてゆく

地下茎からくみだす 大地の滋養

太古から湧き出す清水

自然の生気に いろどられた

若竹のひとすじの みどりは

美しい一つの時間の帯かー

けれども

ひとふし ひとふしに こめられた

想いは ちがつていて

音ならば ハープの音階

クレパスならば 十二色の彩(いろどり)ー

割れる時は

「竹を割ったように」

清冽な ふしめの部屋部屋では

いこい すすみ かんがえ

たった一つしかない空に むかつて

一つの意志は

宇宙と 交わり

風にゆらぎ

風とたたかい

継ぎ目のない一つのふしを 伸ばしてー

地のなかへは これもひたすら

自らを さがしに

空を胸に

秘め

泉のように 盲目のまんまでー

はるかなる大地の果てはるかな 雲の彼方

小鳥のさえずりが

山の空気にさえわたるとき

葉ずれの音が

小さな村を

狂爛(くる)わせてー

その時 竹が鳴る

異星の花嫁

秋月夕香

地球での私の歩みがとまるとき
その時のことは考えたくもない
しかし・・・

私の 次の歩みは
遠い星のもとに お嫁に行くのだ
と 思っている

幼いころ見た すいこまれそうな深い
海のような空
すどく碧く 細くぱちつとした
光に憧れて ・・ 大空へ宇宙へ

今は修行中
そう今はためされているのだ
異国語のひとつも覚えて
例え役に立たなくても
それはそれでいい

私の人生 を無にしない
必至の努力と 心意気
嫁入り道具はそれだけ

私は遠い星に
お嫁に行く

動かず

和比古

石は生きてきた
人間が住む前から
じつと周りを見てきた
動かないで

水が氷となるとき
しわの間に入って
その隙間を抜けても
痛がらずに耐えてきた

太陽からのエネルギーで
爆発しそうになっても
草の衣を着て
こらえてきた

飽きもせず
どうして
ここにいたのだろうか
この景色に馴染んでいるわけではない

これからも
同じことをしていくのであろう
隣の石たちと
石仏のようにして

Japan
Universal
Poets
Association